

岩手県

産地レポート

レタス

東北一のレタス産地、奥中山高原 JA新しいわて 高温期でも結球が安定する

「ヒートガイ」に期待！

(編集部)



↑左からJA新しいわて二戸営農経済センター戸地区担当課、米穀園芸担当の米田望さんとレタス専門部会、副部会長の中嶋徹さん。中嶋さんは冬季はハウスで促成アスパラを栽培する。

地域概況

現在のJA新しいわては平成20年5月に、旧JA新しいわて、JAいわてくじ、JA北いわて、JAいわて奥中山、JAみやこ合同し拡大しました。岩手県のほぼ半分をエリアとし、18の市町村にまたがる広大な面積を有しています。米をはじめ、野菜、花き、畜産酪農など多種多様な作物を生産しており、その生産量は全国でもトップクラスを誇ります。



JA新しいわて 「奥中山高原レタス」の概要

東北一のレタス産地である岩手県の奥中山高原。冷涼な気候を生かして1964年からレタスの栽培が始まり、今年で60年目を迎えます。1968年には指定産地となり、長年「奥中山高原レタス」として親しまれ、JA新しいわてで生産される野菜の主力品目となっています。

栽培面積は結球レタスが約130ha、非結球レタスが約100haでレタス専門部に所属する41戸で栽培されています。作型は大きく春どり(3月まき)、春夏どり(4月まき)、夏どり(5〜7月まき)の3つに分かれ、そのうち夏どりが最も大きい面積を有します。全

体の約6割が契約栽培で、8玉×2段(10kg)のコンテナ出荷がされます。関東方面への出荷もありますが、東北市場を中心に販売しています。

高温下でも結球が安定し、 軟腐病に強いことが 導入の決め手

JA新しいわてで営農指導を担当される米田望さんに近年の栽培状況について伺うと、近年の気温上昇の影響でレタスの安定生産が難しくなっているそうです。特に近年は最高気温30℃を超える日が10日以上にもなり、従来品種で不結球が問題となっていました。

「ヒートガイ」は耐暑性にすぐれる特性から昨年より試験を開始し、部会役員数名で5月上旬〜6月下旬までの栽培試験を実施。その結果、高温下でも結球が安定しており、従来品種同様に軟腐病の発生が少ないことが決め手となり、2024年から試験導入となりました。今年はさらに作型を広げ、



↑6月23日定植の「ヒートガイ」。8月上旬収穫を見込む。2024年も暑さが厳しいが結球は安定しているとのこと。

7月上旬まきでも試験栽培し現地の適応幅を確認しています。

中嶋徹副部会長の評価

副部会長を務める中嶋徹さんは家族と実習生7人と共にレタス栽培面積約22haのうち約5haで結球レタスを栽培されています。今年で就農20年目となる中嶋さんも近年の気温の上昇は肌で感じており、品質を安定させることに苦労しているといいます。

「ヒートガイ」は昨年試験栽培した結果、先述の通りすぐれた特長があり、また玉形状の乱れが少なく安定していたため、今年は面積を拡大されています。今年は栽培2年目ということもあり、夏秋どりは従来品種との併用とされています。天候不順に対応してリスクを分散し、安定出荷につなげる取り組みは指定産地としての責任の重さを感じました。「ヒートガイ」が当地の夏どりレタスを支える一助となることを願っています。



↑株間25×畝間45cmで白マルチを使用。定植、収穫は手作業。天候に左右されるため、計画的な実施はなかなか難しい。